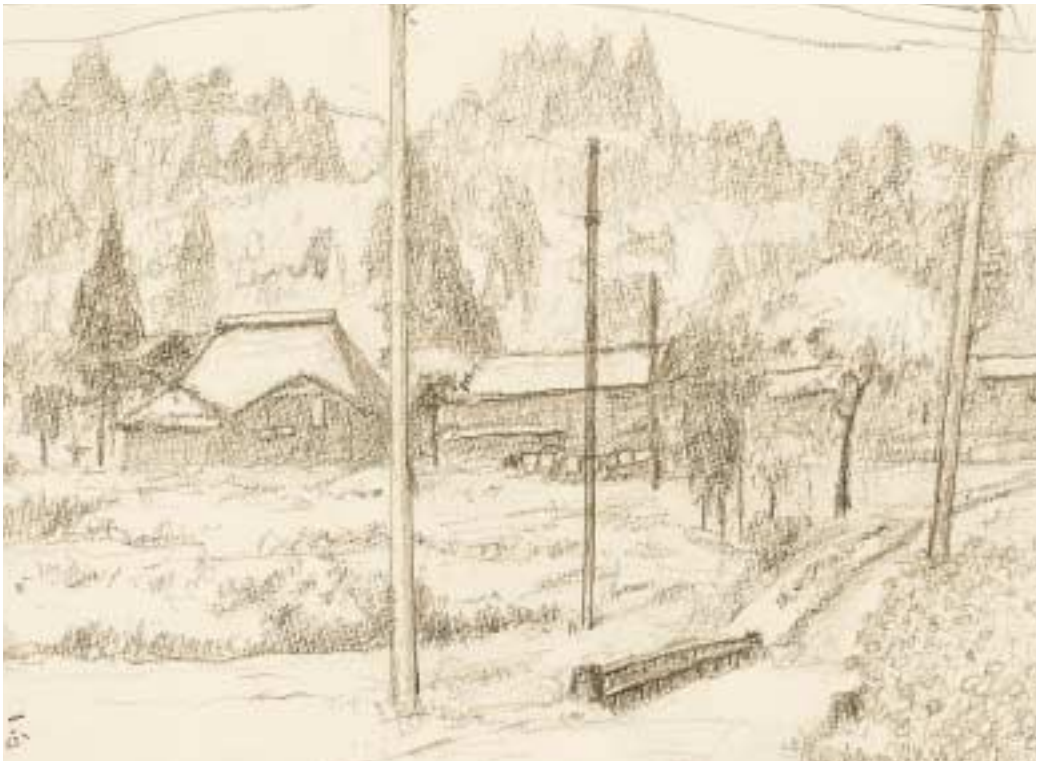
大原（おおはら）



1 集落の歴史

(1) 地名の由来

大原の地名については、『安塚町誌』に「“はら”とは焼畑農業を行っていた所で、生産力の乏しい荒れた地である。それに大の字をつけたのである」と記されている。

しかし、その昔小黒川（おぐろがわ）は東側の山際を流れていた痕跡がある。和田集落に「古川（ふるかわ）」という小字があり、その名のとおり小黒川の流域であったと伝えられている。ここは国道403号と405号の丁字路の付近であり、この近辺から大原の方向を眺めれば、文字どおり「大きな原っぱ」であったと考えられる。

(2) 集落の形成

「昔は200竈（戸）あったそうだ」「地下からいろりの跡か、灰が出た」「人骨が出た」などの言い伝えがある。大原には古くから人が住み着いていたものと思われる。

しかし、記録の上で地名が現れるのは、今から約400年前の「越後国郡絵図」である。これによると、大原の石高は67石余りで小黒地区では最も大きな村であった。ちなみに、大原に次ぐのは行野の約29石、芹田約27石であるから、大原の多さが際立っている。

元禄９（1696）年に幕府は各地の村々の姿を絵地図に描かせている。大原の「村絵図」（安塚町教育委員会蔵）は、坊金の庄屋竹内庄右衛門家で発見された。この絵地図には、

道路や川、耕地などのほかに、15軒の家が描かれ、家と家の間の距離まで書き込まれている（資料編界紙参照）。

以後、明治の廃藩置県まで越後国頸城郡山五十公郷大原村と称した。明治４（1871）年以降は、次のような経過をたどっている。

明治４年　柏崎県頸城郡第13区大原村
明治５年　柏崎県第６大区小８区大原村
明治６年　新潟県第11大区小６区４番組大原村
明治12年　新潟県東頸城郡大原村
明治22年　新潟県東頸城郡小切戸村大字大原
明治34年　新潟県東頸城郡小黒村大字大原
昭和30年　新潟県東頸城郡安塚町大字大原

(3)　地理的環境

町の中央からやや北寄りに位置し、家々は南から北に流れる小黒川両岸の標高約150～170mの間に点在する。川の東西に山地が南北に連なり、古くは西側の河岸段丘上に四十数軒の家が密集しており集落の主体であったが、明治34年の大火で、現在のように散開した。川の東側に家ができたのは、それ以後のことである。

小黒川を挟んで東側には国道405号が、西側には町道大原－和田線が並行して走り、集落の中央に架かる大原橋で、H字型に結ばれている。国道に沿って北には和田、南には樽田集落があり、町道の南は円平坊と戸沢へ、北は芹田と小黒集落に通じている。

2　集落の移り変わり

(1)　検地と耕地面積の変遷

天和元（1681）年に幕府領となり、翌年から検地が行われた。「大原村御検地水帳」（仙田セツ家蔵）によると村高は104石余り、田６町５反歩強、畑２町５反歩強である。

その後、約100年間に４回の検地が行われ、その都度、新しい田畑の面積が加算された。

明治６（1873）年に始まった地租改正の実地測量では、隠し田や歩伸びを正確に書き出させたため、田はそれまでの約４倍に、畑は約1.5倍となった。しかし、近年は経済活動の変化や過疎などにより、棚田の耕作放棄が進み、田は明治９年の約半分に、畑は約10分の１となっている（表３－16）。

表３－16　田・畑・山林面積の推移（単位：町歩）

年号	西暦	田	畑	山　林
天和３	1683	6.5308	2.5322	13.3426
享保９	1724	6.7108	2.6116	13.3426
明和３	1766	6.7423	2.6116	13.3426
明和８	1771	6.7423	4.1219	13.3426
安永９	1780	7.7202	4.6904	13.3426
明治９	1876	27.8105	7.2019	17.9620
昭和25	1950	24.2	10.1	—
平成12	2000	14.15ha	0.78ha	—

注：天和３年～安永９年は「越後国頸城郡大原村本田新田御検地帳」（仙田セツ家文書）、明治９年は『東頸城郡誌』、昭和25年は「大原区有文書」、平成12年は『農林業センサス』による

(2)　戸数と人口

戸数と人口が明記された最古の文書は、延享元（1744）年「大原村差出シ明細帳」（仙田セツ家蔵）である。これは村の要覧であり、村高や年貢、村の概況など百数十項目について書かれている。これによると戸数は30戸に増え、人口も214人を数え、当時としては中規模程度の村に成長している。

以後、戸数・人口とも順調にその数を増し、幕末から昭和の初期にかけて45世帯、300人前後で推移する。

しかし、昭和30（1955～64）年代になると過疎により、世帯数・人口共に次第にその数を減らし、平成13（2001）年には戸沢集落と

写真３－84　大原全景　上：小黒川の西側の集落、右下：川の東側の集落

統合し、現在に至っている。

表３－17　戸数と人口の推移

年号	西暦	戸数	人口（人）		
			男子	女子	合計
慶長２	1597	６戸	－	－	21
天和３	1683	16	－	－	－
元禄９	1696	15			
延享元	1744	30	108	102	※214
文政４	1821	40	－	－	－
文久３	1863	44	140	112	252
明治22	1889	44	－	－	260
大正９	1920	45世帯	－	－	254
昭和12	1937	38	155	154	309
昭和30	1955	41	141	109	250
昭和50	1975	34	74	81	155
平成７	1995	33	63	63	126
平成15	2003	31	59	57	116

注：１　※＝合計人数が男女の計と一致しないが、資料のとおり記載した。
２　慶長２年は「越後国郡絵図」、天和３年・延享元年・文政４年は仙田セツ家文書、元禄９年は「元禄村絵図」、文久３年は南雲村一家文書、明治22年は『新潟県市町村合併誌』、大正９年は『東頸城郡誌』、昭和12年は「郷土調査資料」、昭和30～平成15年は役場資料による

(3)　集落の組織と公共施設

組は、五人組の名残か、古くから４組に分かれている。本村を川上から順に上組・中組・下組とし、本村の一部と川の東側を併せて向組（むかいぐみ）としている。

役員は、天保５（1834）年の村極文書（むらぎめもんじょ）（南雲村一家蔵）で、「庄屋は11人の重立が１年交替で勤める」と決めている。以後、庄屋・組頭・百姓代の村三役を任期１年で輪番に務めている。重立（おもだち）はやがて入れ札で選ばれるようになり、明治41年には代議員選挙が行われ、８人が選出されて、今日に至っている。

現在は４年ごとに１戸１票の選挙で、８人の代議員を選出し、その代議員が輪番で区長（集落嘱託員）を務めている。代理区長（副区長）と会計係は区長が委嘱する。任期は１年となっている。

集落費は、各戸の見立て割りから所得割りとなり、昭和50年から均等賦課となった。

公共施設は、集落センターと消防器具置場がある。昭和52～55年の圃場整備の際、地権者から字前田1350番地に約460㎡の敷地の提供を受け、56年に建坪133㎡の集落センターが建設された。また、その西側、同530番の１に建坪19㎡の消防器具置場が49年に改築され、53年にそれまでの腕用ポンプに替わって、可搬式ポンプと積載車が導入された。

3　神社・遺蹟・石造物等

(1)　諏訪神社

元禄の「村絵図」には、字引万に諏訪大明神、南屋敷に比舎門（明治28・1895年に社号を大原野神社と改称）、中釣根に神明屋敷、円導寺に白山権現の４社が描かれている。

明治41年に各神社を諏訪神社に合祀し、立派な社殿を建立している。境内の北側に４社の石祠が安置されている。例祭日は春４月27日、秋10月20日となっている。

諏訪神社は南雲家、白山社と神明社は田久保家、大原野神社は仙田家の氏神であった。

白山社の境内は、昭和56（1981）年ころまでは、「下のお宮」と呼ばれ、盆踊り会場や子供たちの遊び場となっていた。現在はゲートボール場として活用されている。

写真３－85　諏訪神社　（大原　仙田良一撮影）

(2)　円導寺跡

現在の大原に寺院はないが、小字名に「円導寺」や「新導寺」「寺ノ下」「大門」など、寺院に関する地名が多い。

円導寺は大原で最も小さな字である。南の巨石に端を発した山地が、西から北へと取り囲み、小さな盆地状になっている。東側は段丘崖となって開け、字大門を見下ろすことができる。南の山際に古井戸があり、町道の東側の大門があったと思われる付近にも、古井戸の跡が残っていた。しかし、寺は「村絵図」に描かれていないので、このころには、既に廃寺になっていたものと思われる。

写真３－86　円導寺跡地　左手奥に古井戸がある

(3)　高源寺跡

和田との地境に、通称「コゲンジ」と呼ばれる地点があるが、正確には大字和田の字向山である。町道を挟んで段丘崖の下に字寺ノ下がある。ここに「高源寺」があったと伝えられているが、現在は大島村大字仁上に移転している。火災で記録を消失しているため、いつごろ移転したかは不明であるが、『大島村史』によると、起源は「慶長４（1599）年に当寺を和田村に創立し」とある。

慶長４年は「越後国郡絵図」ができた２年後であり、当時、和田集落は１戸、５人であった。それに比べて大原は６戸、21人であるから、布教の対象は大原や芹田・小黒にあったと考えるのが至当であろう。

また、字中釣根に萬燈場という塚がある。これは専敬寺が真言宗から浄土真宗に改宗した際、法灯や法具を埋めたと伝えられている。

新導寺については文書も伝承もなく、全く手がかりがない。今後の検証を待ちたい。

(4)　郷蔵跡

郷蔵とは、年貢米を保管し、凶作に備えて

穀物を貯蔵する倉庫である。

大原は、寛保２(1742)年には上方、本郷、芹田村とともに、石橋村の郷蔵へ納めていた(『安塚町誌』)。しかし、２年後の延享元(1744)年には安塚村の郷蔵へ納めている(「大原村差出シ明細帳」)。その後、大原にも郷蔵が造られた。位置については、字沢田の103～105番地と、同じく141番地との２つの説があるが、いずれも確証はない。

安永９(1780)年に、岡田村(三和村)の庄屋から、上船倉村の庄屋あてに、「大原の郷蔵へ納める米を、当村で預かっている」という書状(上船倉　山岸健治家蔵)がある。したがって、1744年から80年までの間に建てられ、幕末まで機能していた。

(5) 石　造　物

村道改修記念碑　昭和10年10月、本村内を南北に縦断する道路(現在の町道)改修を記念して建立したもの。建立当時は、村中央部の丁字路に置かれていたが、町道改修の際に消防器具置場の敷地内へ移転された。

田久保源平の顕彰碑　字欠ノ前1123番地に大正10(1921)年７月に建立。南雲喜作ほか11人の弟子たちが屋根葺き職人であった源平(屋号しも)の遺徳をしのんで建てた。

また、南雲勲、数井義璟、田久保芳孝管理の馬頭観音が３体ある。

4　災　　害

(1) 水　　害

天和の検地帳に「中川原水押し場」や「欠ノ下水押し場」、「ぬけ田」など、水害や地すべりに関係する地名が数多く見られる。

「嘉永５(1852)年７月20日(旧暦)の大洪水で、水田４反歩が流失したので、至急御検分願います」という文書(仙田順作家蔵)が残っている。また、「差出シ明細帳」の記録では、元禄12(1699)年から約30年間に、用水堰の普請が５回も行われている。

大正３(1914)年８月13日の朝から降り続いた雨は、夜になると一層激しさを増し、14日の午前３時ごろには大洪水となり、逃げる間もなく激流が押し寄せたという。小黒川べりにあった屋号板屋(氏名不詳)が濁流に押し流され、老夫婦の助けを求める声を聞きながらなすすべもなかった。翌朝、老妻が首まで砂に埋まっているところを助けられたが、老夫は遺体となって柿崎の浜で発見された。

当時の小黒川は、今よりも川幅は狭く、川底も浅かったと伝えられている。

最も記憶に新しい水害は、平成７(1995)年７月11日の集中豪雨で、小河川の氾濫、床下浸水、道路の損壊、棚田の被害が発生した。

(2) 地 す べ り

大原には扇状地状の地形が多い。これは、100年に１回襲うといわれる集中豪雨により、発生した地すべり地形と考えられる。しかし、地すべりの記録は残されていない。

昭和28(1953)年７月、梅雨前線による集中豪雨のあと、突然バリバリと木の裂ける音に続いて、轟音と共に字山田から引万や堰野へ土石流が流下した。土砂が波のようにうねりながら田畑を埋め尽くしたという。

有史以来、このような地すべりが繰り返され、大原の台地が形成されたと考えられる。

(3) 明治の大火

数井一郎は約１世紀前の大火について、記録(全文は資料編近現代第７章に掲載)を残していた。ここでは事実のみを記載する。

日時　明治34年５月２日15時～３日２時
被害　家屋29・土蔵７・物置６棟、計42棟
被災した家（29戸）

南雲八左衛門、南雲俊藏、南雲民藏、南雲初太郎、南雲次郎作、南雲喜作、南雲佐傳治、南雲重左衛門、南雲清藏、南雲萬平、南雲八百吉、南雲定吉、南雲休兵衛、南雲サヨ、仙田新次郎、仙田藤右衛門、仙田周作、仙田爲吉、仙田勘五郎、仙田壽作、仙田作次郎、仙田忠吉、田久保忠作、田久保文右衛門、田久保九助、田久保九之助、數井仙八、數井新五郎、數井一郎

焼けなかった家（13戸）

南雲松藏、南雲由松、南雲市兵衛、南雲只右衛門、仙田惣吉、仙田源作、仙田德五郎、仙田美代藏、田久保作藏、田久保繁吉、田久保德三郎、田久保健治、數井萬五郎

5　伝　　承

天和の検地帳の小字名に「八人塚」という奇妙な地名が見える。これについて、次のような言い伝えが残されている。

田久保義治（屋号大清水）家の先祖は、村で一、二を争う分限者であった。この家へある晩、８人の盗賊が押し入った。家人の叫び声に目を覚ました主人は、伝家の宝刀を取り出して賊と渡り合い、８人すべてを返り討ちにしてしまった。あとの祟りを恐れた主人は、亡きがらを手厚く葬り、塚を築いたのが「八人塚」である。主人は元武士であり、侵入者は落ち武者であったという説もある。

場所は字沢田156番地で、現在は塚の跡形もなく、うっそうとした、昼なお暗い杉林となっている。

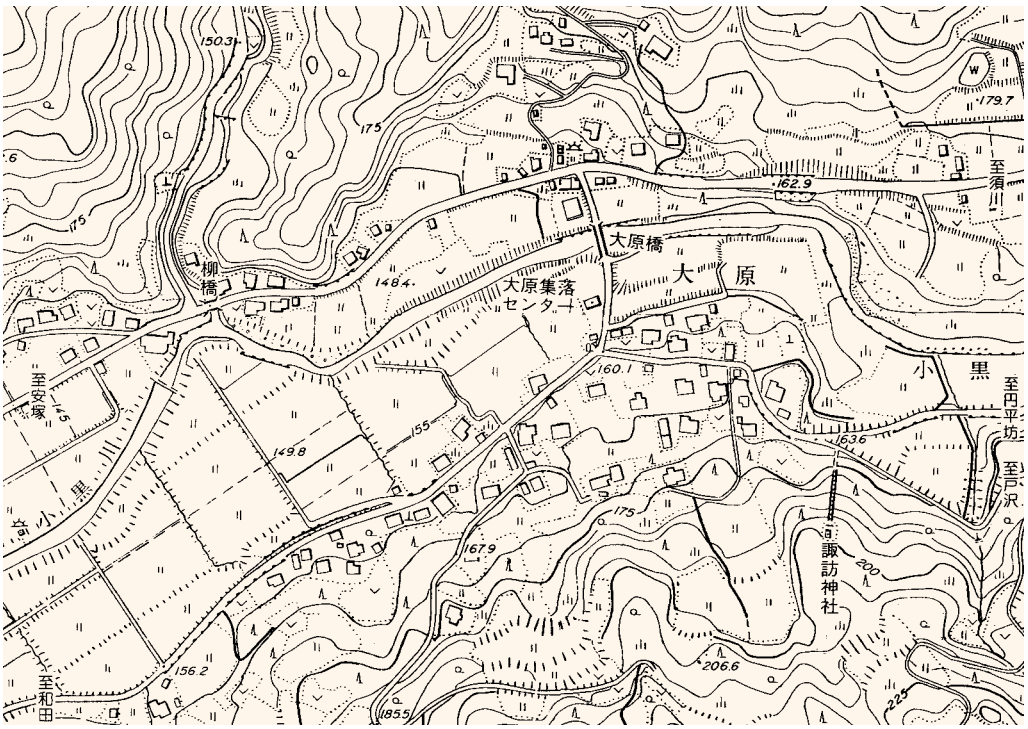


図３－13　大字大原集落図

戸沢（とざわ）

1 集落の概要

(1) 地名の由来

「戸沢」の由来に関する言い伝えは、何も残されていない。

『安塚町誌』では、「戸は木戸口（入り口）の戸で、境をあらわしている」としている。また、『新潟県地名考』（五十嵐秀太郎著）によると、「戸」は、「家の出入口、かどぐち、入口、…（中略）…区切られた区域の出入り口、境界」とされている。

確かに戸沢集落は、周囲をぐるりと山にとり囲まれ、その中を深い沢（大平（おおだいら）川の源流）が北北東へ流下している。沢を挟んで傾斜の緩やかになった所に耕地が広がり、耕地の尽きる所で両側の山が迫り、北北東へ傾斜した細長い馬蹄状の地形となっている。

したがって、馬蹄のくびれた両端に「木戸口」を設ければ、まさに「区切られた区域の出入口」になると考えられる。

(2) 集落の形成

最盛期の戸沢は、30軒近い家と約180人の人口を擁していた。そのすべてが「池田」姓であった。時代も出自も不明であるが、一族がこの地に移り住んだものと考えられる。

戸沢の地名が初めて出現するのは、慶長２（1597）年の「越後国郡絵図」である。

以後、江戸時代から明治４（1871）年までは頸城郡戸沢村といい、初めは高田藩領であ

ったが、天和元(1681)年から幕府領となる。明治４年に柏崎県、同６年には新潟県となる。明治12年に東頸城郡ができ、22年には小切戸村の大字となり、34年に小黒村、昭和30（1955）年に安塚町となった。

(3)　地理的環境

町のほぼ中央にあり、小黒川と朴ノ木川とに挟まれた長倉山の北東斜面の中腹で、標高300m付近に位置している。北へ下れば大原、東は円平坊、西は峠を越えて小黒と切越集落に接している。

かつては四罷(通称シッカカリ)峠を越え、小黒へ下る道が主要な街道であったが、昭和40年代に大原へ舗装道路が開通し、ようやく車が通るようになった。

その後、長倉山経由で円平坊や真荻平、朴ノ木へと通じる町道や林道が整備された。

写真３－87　戸沢入り口

2　集落の移り変わり

(1)　検地と耕地面積の推移

上杉景勝は文禄４(1595)年に検地を行い、その結果を、２年後の慶長２(1597)年に「越後国郡絵図」にまとめた。それには「戸沢孫八郎分、戸沢村、下、本納３石、縄ノ高３石１斗５升８合３勺、家２軒、７人」とある。これは「戸沢孫八郎へ３石の年貢を納める村」を意味し、「縄ノ高」とは田や畑、屋敷などすべてを米に換算した村の生産高である。「家２軒、７人」とは年貢を納める家のみであった。

表３－18　田・畑・山林面積の推移（単位：町歩）

年号	西暦	田	畑	山　林
天和３	1683	1.1118	2.2802	16.4726
明和３	1766	1.1400	2.2802	16.4726
明和８	1771	1.3424	2.2802	16.4726
安永９	1780	2.5717	4.1820	16.4726
明治９	1876	14.2216	11.4927	24.5828
平成12	2000	1.60ha	0.13ha	——

注：天和３年～安永９年は「越後国頸城郡戸沢村御検地水帳」・「同新田検地帳」（池田直一家蔵）、明治９年は『東頸城郡誌』、平成12年は『農林業センサス』による

天和３（1683）年に検地が行われ、その結果は「戸沢村御検地水帳」（池田直一家蔵）に記載されている。これによると、村高のほかに、田畑や屋敷、山林の面積も記録されている。

以後、明和３（1766）年、同８年、安永９（1780）年に新田検地が行われ、新しく開墾された田や畑の石高や面積が、天和の検地の成績にそれぞれ加算されている。

明治９(1876)年に政府は地租改正を行い、隠し田や歩伸びを正確に書き出させたために、田は６倍近い14町歩余りに、畑は３倍強の11町歩余りに膨れ上がった。

近年は繰り返し襲った地すべりと過疎により、耕地の放棄が続き、田は明治９年当時の約10％、畑は約１％となった。

(2)　戸数と人口

池田直一家には、宗門人別帳が宝暦８（1758）年から明治３（1830）年まで、不連続であるが30冊保管されていた。

戸数は、宝暦８年から天保７（1836）年ころまでは30軒近い数で安定しているが、幕末

から明治にかけて漸減傾向が見られる。昭和年代になるとその傾向が更に強まっている。

人口も文政２（1819）年の177人を最高に、戦後まで戸数は減っても、ほぼ一定の数を維持していたが、昭和30（1955）年以後は、急激にその数を減らし､平成13(2001)年には大原集落と合併することになった。

表３－19　戸数と人口の推移

年号	西暦	戸数	人　口（人）		
			男子	女子	合計
慶長２	1597	２戸	—	—	7
天和３	1683	6	—	—	—
宝暦８	1758	29	70	76	146
天明２	1782	28	78	78	156
文政２	1819	27	93	84	177
天保７	1836	29	—	—	130
万延元	1860	23	69	70	139
明治３	1870	25	74	79	153
明治22	1889	22	—	—	146
大正９	1920	24世帯	—	—	169
昭和12	1937	21	81	94	175
昭和30	1955	20	54	70	124
昭和50	1975	15	24	25	49
平成７	1995	10	12	9	21
平成15	2003	6	5	4	9

注：慶長２年は「越後国郡絵図」、天和３年は「戸沢村御検地名寄帳」（池田直一家蔵）、宝暦８年～明治３年は「戸沢村宗門人別御改帳」（同）、明治22年は『新潟県市町村合併誌』、大正９年は『東頸城郡誌』、昭和12年は「郷土調査資料」、昭和30年～平成15年は役場資料による

3　神　　社

集落の西側、字上ノ平（かみのたいら）350番地のやや小高くなったところに境内があり、そこに金山（かなやま）社の石祠（せきし）が安置されている。

祭神は金山彦命（ひこのみこと）であるが、人々は親しみをこめて「金山権現」、あるいは「権現様」と呼んでいる。春は４月15日に、秋は11月15日に、数こそ少なくなったが氏子全員で力を合わせ、例祭を行う。

写真３－88　金山社の石祠

鉱山や鍛冶の守護神である金山彦命を祀る神社は、県内に40社ほどあるが、神社名を「金山社」としているのは上越市東原、糸魚川市来海沢など７社のみである。

4　地すべり

「戸沢といえば地すべり、地すべりといえば戸沢」といわれるほどに、戸沢は繰り返し大地すべりに襲われてきた。

文久元（1861）年の「村方様子書上帳」（池田直一家蔵）に「古来より山崩場」とあり、「山崩れ」は大昔から絶えず繰り返されてきたものと思われる。

しかし、集落の生活基盤を根底から揺るがす大崩壊は、大正３(1914)年から始まった。以後、昭和２（1927）年から54年にかけて７回の地すべりに襲われている（通史編近現代第７章参照)。

写真３－89　地すべり　写真中央の山からすべり落ちた。手前と中ほどに２段になった土留めの堰堤が見える

昭和11年に始まった滑動の様子が「地辷日誌」（池田直一家蔵）に書き残されていた。

５月１日　未明より、三つ池及向田両字崩壊に付き警戒、駐在所、警察署等へ報告に従事、夜、７名ずつ交替にて警戒、池田直吉外20名

５月２日　小黒村第１部消防手の応援にて川まわし防泥作業に従事、夜、７名ずつ交替にて警戒、足代木10本（池田）政治、防泥用材料杭10本直吉、５本ずつ伊作、啓次郎、秀信、ソダ10ケ直吉、５ケずつ伊作、啓次郎、秀信、炊き出し１斗直吉、５升ずつ伊作、秀信、縄１束啓次郎（以下省略）

集落総出で、日中は大平川（戸沢川）の切り回しや防泥工事に従事し、夜間は７人ずつ３交替で警戒に当たる。こんな日々が８日まで続き、９日にようやく警戒を解く。その後、５月下旬から９月までの間、用水や川、道路の復旧工事が続いた。10月に県の耕地課、12月に林務課の視察で日誌は終わっている。

この間、実働21日間、動員した人員は延べ370人余り、杭、竿約100本、ソダ約270束など、すべてを21軒で負担し合い、自力で応急工事に当たっている。

次々と発生する地すべりから集落と耕地を守るために、住民が味わった辛酸は筆舌に尽くしがたいものであった。

沢沿いの標高200ｍから400ｍの間に築かれた十数基の堰堤が、地すべりの規模の大きさを物語っている。

写真３－90　現在も続く防災工事　（平成15年）

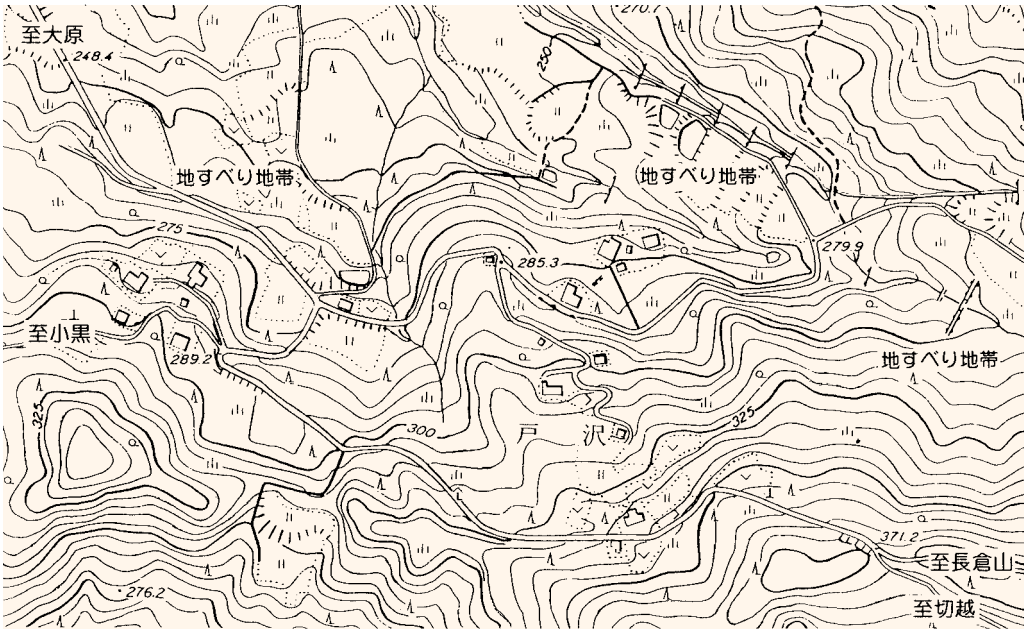


図３－14　大字大原（戸沢）集落図